

基調
講演

テーマ「魚と環境」

いなむら おさむ
講師 稲村 修氏
(魚津水族館 飼育研究係長・学芸員)

自然界を水そうに

今日は富山の淡水魚について話します。私は水族館で魚を飼育していますが、たとえばメダカはどうやって飼いますか？メダカが生活しやすい水温(4~30度)を保つために、太陽の役目をするヒーターや照明、水をきれいにするバクテリアのように働くろ過装置、風や波のように水に酸素を取り入れる働きをするエアポンプなどが必要です。このように魚を飼うときは、自然界での働きを水そうに移して環境をととのえます。



◇



魚がすめる環境

田んぼの魚を紹介しましょう。まずはドジョウです。川の上流にすむもの、砂利や砂の多い所にすむもの、また葉のかけや流れがゆるく泥っぽい所にすむものなどがあります。田んぼのまわりの用水路などにもすんでいます。同じドジョウの仲間でも、すむ場所や環境は少しずつちがいます。また春に田んぼに水が入ると、ナマズやメダ

カが卵を生みます。最近魚が川から田んぼへ上がりにくくなったため、全国各地で川と田んぼをつなぐ魚道づくりなどが行われています。またメダカは田んぼだけで一生を過ごせないで、まわりにため池や川のある環境が必要です。

魚が育つ環境

富山県は高さ3000m級の北アルプスから水深1000mの海まで約50kmの間にあります。このような珍しい環境のなか、イワナは急流の黒部川をさかのぼり標高2000m以上まで行き、おそらく日本一高い所で生活します。また川の魚とされるアユの赤ちゃんは海の近くで育ち、春に川へもどって成長し、秋にまた河口近くで産卵し一生を終えます。このほかヤマメは約3年の寿命のうち1年ほど海にすむものがあります。これが桜の季節に川へもどりサクラマスと呼ばれ、昔はマス寿司の原料になりました。明治時代には神通川に160トンも上って、遠く飛騨高山まで行ったそうです。



互いに助け合う魚と環境

サケは秋に産卵のためもどって来ます。富山で放流されたサケはアラスカで3~4年成長し、アラスカの栄養を運んで来ます。水の流れにさからい、自分の体に栄養をたくわえて運ぶ…。これは魚という生き物の大きな力です。サケは川をさかのぼり産卵して山で死にます。死んだサケが栄養となり山の木や森が育つのです。このように魚と環境は互いに助け合う“相互作用(そうごさよう)”で成り立っています。魚は魚だけでは生きられず、また魚がいないと環境も変わってしまうのです。

命がともに暮らせる環境を

最後にイタセンパラのお話しです。イタセンパラは世界でも日本の大阪・淀川水系と名古屋・濃尾平野、そして富山県氷見市にしかいません。水族館で増やすのは難しく、貝に卵を生みつけるので、その貝も保護しなければなりません。イタセンパラを守るには、まわりの環境全体を守ることが必要です。魚がすむ水中と人が生きる陸上の環境は違います。でも大きく見渡せば、魚がすめない水環境では、人も生きられません。すべての生きものがともに生きる環境をつくるため、これからも水について調べ学び続けてください。



稲村 修氏 氏

プロフィール

東海大学海洋学部卒業後、魚津市役所入所、魚津水族館に勤務(飼育技師)。2007年4月より現職。同年、北海道大学大学院環境科学院入学、博士後期過程在学中。1990年より氷見市イタセンパラ保護指導委員会委員としても活動。専門分野は魚類学、環境科学。